令和7年度　学校関係者評価（結果）

学校番号	62208	学校法人脇谷学園　静岡南幼稚園	記載者	青島範明

学校教育目標	遊びを通して様々なことを学び、互いの考えを尊重しながら、自己を確立する。	【総合評価】 　自己点検評価同様、学校関係者評価においても、全項目が「4」の評価となっている。これに関しては、教職員の取り組みを高く評価してくれている状況がうかがえる。各項目における「今年度の成果と課題」及び「次年度の取り組み」に対する意見も、教職員が見落としがちなところまで指摘をしてくださっていることは、非常にありがたいことで、次年度の取り組みに大いにいかしたい。 学校関係者評価委員会でも、インクルーシブ教育の展開と特別支援コーディネーターを中心としたサポート体制の構築による保護者満足度の高さが評価された。しかし、保護者に対するインクルーシブ教育に対する意識の浸透がなされているかという点に関しては、十分な理解を求め、一層深める努力をしていく必要がある。また、情報発信に関しては、今年度から導入した「おうちえん」の活用に伴い、幼稚園内における園児の教育活動の可視化と保護者に対する情報提供が評価されれた点は嬉しいところである。今後、どの学年においてもタイムリーな情報発信を展開できるよう努めたい。 一方で、園舎の老朽化や安全面などでの指摘もあり、園の財政状況から園舎の立て直しやリノベーションを視野に入れているものの、しっかりとした財政基盤を確立させ、取り組むことが急務という点を強く認識させられた。
教育方針	・学校教育法及び幼稚園教育要領に従い、幼児教育の役割を遂行する。 ・家庭では体験できない新たな世界と出会いの場を設け、幼児の自立に向けた基礎を育成することをねらいとした教育を目指す。	

今年度の重点目標	評価	今年度の成果と課題	次年度の取組
1　少子化がさらに進行する中、目標園児数（収容定員）を獲得する。	4	今年度は、未就園児向けイベントを継続実施し、園の教育・保育の質や雰囲気を伝える機会を確保できた。参加家庭からは安心感や好意的な反応が得られ、家庭・地域との連携も進み、園の魅力が地域に広がったことは大きな成果である。一方、少子化により参加者数の安定確保や入園への転換率向上が課題として残った。今後は、継続的な関係づくりと特色発信を強化し、地域に信頼され選ばれる園を目指す必要がある。	次年度は、未就園児向けの「りんごちゃん」や各種園行事への参加促進をさらに充実させ、地域の子育て家庭との接点拡大を図る。園庭開放、親子参加型イベント、子育て相談などを継続的に実施し、家庭が園の雰囲気や教育・保育の質を実際に体験できる機会を増やすことで、保護者の安心感と信頼を高め、入園につながる関係づくりを進めていく。
2　時代を見据えた教育を展開する。	4	教職員・保護者の中で、発達支援に対する理解が深まり、時代が必要とするインクルーシブ教育が展開している。 「おうちえん」の導入により、園児のポートフォリオ、「園だより」、園児の活動状況を画像・映像・文章で、タイムリー配信してくれたことで、園での活動状況が可視化され、保護者の安心感につながった。	次年度は、社会の変化に対応した教育の充実と、子どもが主体的に学べる環境づくりを進める。また、未就園児向けイベントや園庭開放、親子参加型行事、子育て相談を継続し、地域の子育て家庭との接点を広げる。さらに、広報手段の見直しやSNS活用、地域子育て支援センターとの連携を強化し、園の魅力を広く発信することで、地域に開かれた園として入園につながる関係づくりを進めていく。
3　5年度・10年後を見据えた本園の姿について検討する。	4	方向性を具体的な教育計画や地域支援に反映し、学びの充実と未就園児支援の強化を進めることができた。 長期的なビジョンを日々の実践につなげることで、園の魅力と教育力を継続的に高め、地域に信頼される園づくりを目指していく。	保護者とともにインクルーシブ教育への理解を深めることを重視し、園だよりや参観会などを通して、これまで大切にしてきた教育の価値と現代の教育理念を結びつけて伝えていく。今後は、質の高い教育と家庭・地域との連携を生かし、地域に信頼され、選ばれる園としてさらに成長していくことを目指す。

領域	ねらい	評価項目	今年度の達成目標	昨年度の実績	評価	今年度の成果と課題	次年度の取組
学校経営 ・ 教育課程　・ 指導方法	適切な教育課程が編成され、学習目標・計画が明示され、日常の学習活動を効果的に展開する。	教育課程、教育目標・計画・指導、課題実	「ダンスあそび」から「あそびっこ」、さらには「フットボール」と学年が上がっていくと、身体を動かす楽しさから、基礎体力・基礎運動能力の強化、そして考えながら運動する力を備えるような段階的なプログラムをもっと保護者や入園希望者に理解してもらう活動をする。 園内の活動だけでなく、園外の活動にも積極的に取り組むことで、園児たちに多くの経験を積ませ、その経験値を使って、活動に対する幅を持たせる教育をする。	「あそびっこ」を通じて年中・年長の子ども達に発達に応じた運動遊びを実施し、基礎的な動きや体力強化をすることができた。また、園の行事や発表の際には、子ども達自身が主体的に何をしたいか、どのように作りたいかを考え、工夫しながら取り組む姿勢を尊重する教育環境が整えられていた。 教員達が年齢に応じた子どもの主体的な取り組みを応援し、サポートする姿勢が素晴らしく、教員の創意工夫によって季節やテーマに沿った教室の装飾、歌、遊戯、絵本などが準備され、一貫性のある体験や学びが提供されていた。クラス担任に裁量が認められている点も良いと感じる。 ALT（外国語指導助手）による英語遊びや外部講師によるフットボールなど、他の園では珍しい活動や遠足の多さは、静岡南幼稚園の大きな強みである。これらの活動を今後も継続し、園児達に多くの経験と刺激を与えてほしいと願っている。	4	今年度は、あそびっこや体操教室、遠足・山登りなどの多様な活動を通して、子どもたちが無理なく楽しく身体を動かす機会を十分に確保することができた。その中で、基礎体力や運動能力が日常的に育まれ、身体を動かすことを楽しむ姿が多く見られたことは大きな成果である。 また、外遊びや工作などを通して、体力だけでなく巧緻性も自然に育つ環境が整っており、「自分で考え、やってみる」意欲や主体性を支える教育が実践されている点も園の強みとして評価される。 さらに、英語活動では、色の名前や簡単な言葉を自然に口にする姿が見られ、楽しみながら親しむ学びが進んでいる。 一方で、現代の子どもたちの体力低下が指摘される中、これからの生活に本当に必要な体力や育てるべき力とは何かを改めて捉え直し、今後の教育に生かしていくことが課題として示された。	次年度は、子どもの発達段階に応じた運動遊びの指導をさらに工夫し、年齢に合った無理のない活動を計画的に進めていくことを重視する。 また、ケガや事故を防ぐため、補助の位置や方法についてクラス担任間で共通理解を徹底し、安全性の高い指導体制を整える。あわせて、学年が上がるにつれて活動内容が広がることを踏まえ、子どもが簡単な個人目標を持って取り組める機会を設け、活動への目的意識を高めていく。 さらに、活動後には「できたこと」や「がんばったこと」を振り返る時間を取り入れ、自分の成長を実感できるようにすることで、意欲や自己肯定感の育成につなげていく。
安全管理	日常から防災に対する意識を高め、予期せぬ災害時に適切な対応ができる体制作りをすることが必要。また、学校としても校内の危険個所の定期的な点検、園バスの安全運行といった意識を常に持ち合わせる。 園児の健康管理のための検診計画を作成・実行し、疾病者に対する治療勧告を行う。	防災訓練（校内・校外）、災害時の対応、安全な教育環境、安全なスクールバスの運行、検診計画、健康管理指導	基本的な運動能力を高めることで、子ども達の健康を守ることができると考えられるので、「あそびっこ」の活動を通じて、体力をつけることや病気になりづらい体作りを目指す。 主に遊戯室での活動が多いため、外道路での活動にも目を向けて交通安全や不審者対策に注意を払っていく。外での活動を通じて、子ども達が安全に楽しく過ごせる環境を整えることが重要である。	事故なくバスの運行ができたことが良かった。また、感染症の流行はまだ続くと予想されるため、対応を速やかに、かつ安全に行うことが重要である。園バスの安全対策についても迅速な対応が見られ、保護者としても安心した。来園者への警戒だけでなく、万が一不審者が侵入した際の実践的な訓練も行っており、先生方と生徒たちがどのように行動すべきかを学ぶことで、さらなる安心感を提供。 安全ブザーの設置により、安全対策が強化され、人数確認と安全ブザーの使用で今後も安全に努めていただきたい。また、保護者側もコミュナビを活用し、確実に欠席連絡を行う必要がある。 新年度に配布する手紙には、幼稚園に入る際にはインターホンを押すように記載することを検討しても良い。現在、英語やくじゃくのお迎えの際にインターホンを押すか迷う方が多いため、こうした場面ではインターホンを押すように周知していくと良い。	4	日常の活動や「あそびっこ」を通して、子どもたちの走力・持久力・瞬発力など体力面で着実な成長が見られた。 また、防災への意識や取り組みは継続されており、避難訓練にとどまらず日常保育の中にも防災教育を取り入れようとする姿勢が見られ、保護者の安心感にもつながっている。 一方で、門扉の施錠管理の不備や、園舎・設備の老朽化といった安全面の課題が明らかとなり、安全管理体制の一層の強化が求められる。あわせて、災害時の連絡体制や引き渡し方法を保護者に分かりやすく周知できる仕組みづくりや、近年の災害状況の変化に対応した防災知識・対応マニュアルの継続的な見直し、定期的な点検と計画的な修繕が必要である。	次年度は、手洗い・うがいの習慣を継続し、感染症予防を一層進めるとともに、あそびっこを通して育まれてきた防衛体力をさらに高められるよう、活動内容の充実を図る。 また、不審者対応では門扉管理や職員の対応体制を見直し、安全確保の強化に取り組むほか、園バスについても安全運転の徹底と確認体制の明確化を進める。 さらに、園庭の水まきによるほこり対策を継続し、健康被害の軽減に努めるとともに、2階ガラス窓の破損時を想定した安全対策や応急対応を保護者にも分かりやすく共有し、安心感の向上を図る。 加えて、防災訓練や引き渡し訓練を継続し、災害時の対応力を高めながら、防災に関する情報提供の充実にも努めていく。
子育て支援	年間を通じて、本園独自の子育て支援活動に積極的に取り組む。	年間を通じて、開園日の預かり保育及び長期休業中の預かり保育の実施、入園希望者に対する園の公開活動、未就園児を対象とした本園独自の活動の展開	発達に関する様々な心配を持つ保護者に対して、幅広いサポートの窓口を設け、多様な方法で関わりを持つことが重要だと感じている。保護者が安心して相談できる環境を整えることで、子ども達の発達支援をより効果的に行うことができると思う。 入園を希望する家庭に対して、行事の通達を確実に行うことが求められる。スムーズな情報伝達を通じて、親御さんが園の活動に参加しやすくなるよう努める。	未就園児行事を多く取り入れたことは非常に良かったと感じる。これにより、未就園の子どもと親のサポートを通じてスムーズな移行を目指す試みが行われていた。アンケートを実施し、預かり保育の実態や保護者のニーズを把握することもできた点が良かった。また、幼稚園入園前に子供同士・保護者同士のコミュニケーションを図る場が設けられているのは良い。外に出て、ちょっとした悩みを先生や友達、初めて会った方に聞いてもらえることでリフレッシュでき、育児を頑張ろうと思えるので、これからも続けて欲しい。 預かり保育については、利用時間帯や曜日、料金についてのさらなる実態調査やニーズ確認が必要と考えらる、保育園や託児、シッターとの住み分けもあるため、すべてに応じる必要はないのではないかとも思われる。重点目標にある「時代を見据えた教育環境を展開する」とのことについては、発達に特性のある園児の保護者へのアプローチやキラキラ個性をテーマにしている点はとても手厚く感じる。一方で、提携園として位置づけるには私学を目指す子へのアプローチが今後の課題として見える。 長期休暇における預かり保育の料金設定についても、もう少し検討して欲しい。現在、料金の値上げが行われており、幼稚園選びに悩んでいるという話を聞く。幼稚園の経営に関わることなので難しいと思うが、長期休暇中の預かり保育については、1時間単位での請求が助かるという声もあるので、今後の対応を期待したい。現値上げした子たちの妹や弟が2、3年後に入園し、兄弟で預けた際の1日の負担が大きくなり、そこに対する対応が課題となる。	4	園庭開放などにより、子どもたちが自由に遊び、主体的に活動できる環境が整っていたことは大きな成果である。 また、特別支援や合理的配慮の体制が充実し、一部の家庭だけでなく、多くの親子にとって利用しやすい支援として広がりつつある点も評価できる。 さらに、預かり保育の実施日が増えたことで、就業している保護者にとって利用しやすい体制が整い、園が保護者に寄り添う姿勢がより明確になった。 保護者が安心して相談できる環境が整っていることは、家庭と園が連携して子どもを支えるうえで大きな意義がある。 一方で、特別支援をさらに有効に活用していくためには、保護者の理解促進や意識向上が必要であり、今後は情報提供や啓発の機会を増やすとともに、より多くの家庭が自然に支援を利用できるよう、園としての発信や説明の工夫を進めることが課題である。	未就園児を含む地域の家庭に対する子育て相談を継続的に行い、地域における子育て支援の充実を図っていくことを目指していく。 また、長期休暇中の預かり保育については、実施日数や利用料金の見直しを進め、より多くの家庭が無理なく利用できる体制づくりに取り組む。 こうした支援を通して、保護者が安心して悩みや不安を相談できる環境を整えるとともに、家庭と園が連携しながら子どもの育ちを支えていける関係をさらに深めていく。 今後も、地域に開かれた園として、子育て家庭に寄り添う支援の充実を進めていくことが期待される。

特別支援教育	支援が必要な子、気になる子への対応をすると共に、特別支援計画をたて実行する。	支援計画・支援体制の確立、巡回訪問カウンセリングの活用、療育施設との園児に関する情報交換、保護者との情報交換	特別支援コーディネーター、クラス担任、そして家庭の連携が大切であると感じている。特に、家庭の理解と協力を得るために、特別支援コーディネーターを中心に園全体で子ども達の支援を行うことが重要である。これによって、子ども達が最適な環境で成長できるようサポートしていくことが求められる。	特別支援コーディネーターを設置することで、より一人一人の子どもに目を向ける機会が増え、保護者にもその取り組みが伝わったのではないかと感じた。専用の面接室やプレイルームを開設した点も高く評価され、子ども達が安心して相談できる環境が整えられている。 独立した特別支援コーディネーターを置くことで、子どもの発達に合った療育施設や病院を紹介してもらうことができている。気になることがあってもどうすれば良いかわからず悩む保護者に対して、面談室を設け相談しやすい環境を整え、安心感を与えている。また、コーディネーターは資格取得にも意欲的であり、専門性を高めるために努力している。 特別支援コーディネーターが地域の療育や医療機関と連携を図るために活動している点が特に素晴らしいと思う。保護者に対しても特別支援コーディネーターの存在と活動が広く周知され、「特別な子」だけが利用する場ではなく、発達に関する気軽な相談の場として認識されることが期待される。保護者にとっても心強い存在となり、園にとっても大きな強みであると感じる。	4	特別支援コーディネーターと保護者との面談体制が充実し、保護者が一人で悩みを抱え込まず、相談や助言を受けられる環境が整っていることは大きな成果である。 教員との連携も円滑で、専門スタッフの配置や個室の整備、メールやLINEによる相談体制など、保護者に配慮した支援が安心感につながっている。 また、地域の療育機関や医療との連携も充実しており、専門家の助言が子どもの成長を支える大きな力となっている。 独立した特別支援コーディネーターを配置していることは園の大きな強みである。 一方で、子どもが安心して気持ちを切り替えられるクールダウンスペースについては、刺激の少ない環境や快適さへの配慮など、さらなる整備が今後の課題として求められる。	次年度は、特別支援コーディネーター・保護者・担任の連携体制をより分かりやすく共有し、必要な支援を誰もが安心して利用できる仕組みづくりを進めていくことが重要である。 また、インクルーシブ教育について、園の基本的な考え方や日々の具体的な取り組みを各家庭に丁寧に伝え、理解を深めてもらうことも大切な課題である。 こうした発信を通して、保護者が支援の内容や意義を理解し、園と協力しながら子どもの育ちを支えられる環境を整えていく。 今後は、誰もが利用しやすい支援体制の充実と、保護者との相互理解を土台とした、安心できる教育・保育環境づくりをさらに推進していくことが期待される。
教育環境	園児たちが楽しんで教育活動に取り組める環境づくに工夫をする。	「週案」及び「日案」における計画的な教育活動の実施、日常の教育活動の展開のうえで、興味・関心を高める工夫、活動の振り返りによる次の活動に対するモチベーションを高める	日々の子どもの様子や、外やお部屋での活動の取り組み、得意や不得意、好き嫌いなど、全てを把握することは難しいと感じている。しかし、一つ一つを見守りながら、子ども達の成長につなげることが大切だと思う。これからも丁寧に子ども達を見守り、成長を支えていきたい。	幼稚園では準備と環境整備がしっかりと行われている様子が感じられる。保護者の協力のもと、本が整理され、推薦図書が並べられるなど、図書コーナーがさらに充実してきた。畳のコーナーについてはダニの問題があるかもしれないが、設置を検討して欲しい。また、設置図書については、古くなったものもあり、修理の必要性があるので、保護者のボランティアを募るなどして対応をするとよい。 タブレットとアプリの導入は画期的であり、今後の展開に期待している。ただし、保護者の不安もあるかもしれないため、幼児期からできるタブレットやネットとの付き合い方について、保護者と共に考えていく場を設けることが求められる。教室は整理整頓されており、壁には季節ごとの作品や飾り付けが施され、子ども達が楽しむことができる。行事の写真が貼られており、子ども達も自分の成長を感じることができ、写真を見ながら思い出話をしてコミュニケーションが図れると感じた。 発達障害のお子さんが刺激や情報が過多にならないよう、クールダウンできる避難場所の設置が心の安心につながっている。とてもかわいい避難場所が設置されており、その点も評価できる。 トイレが怖い園児に対しては、トイレのドアに好きなキャラクターを貼り、安心して入れるようにするなど、一人一人の気持ちに寄り添った対応がされている。	4	今年度は、前日の準備から当日の活動まで、教職員が状況に応じて柔軟に対応しながら保育を進め、子ども一人ひとりに寄り添った丁寧な関わりを実践していたことが大きな成果である。 子どもが自ら考え、挑戦する姿を大切にし、必要以上に手を出さず見守る姿勢が徹底されており、主体性を育む環境が整っていた。 また、園全体で子どもを見守る体制が確立され、どの教職員も温かく声をかけるなど、安心感のある教育が行われていた。 季節の行事や日常活動に真剣に取り組む姿からも、教育環境の充実がうかがえる。 一方で、より多様な子どもの姿に応じた支援を進めるためには、活動場所や教育空間のさらなる工夫が必要であり、今後も子どもたちが安心して学び、のびのびと成長できる環境を継続的に整えていくことが課題である。	週案や日案に基づく計画的な教育を継続しながら、子どもの姿やその日の状況に応じて、準備や活動内容を柔軟に調整できる体制をさらに整えていくことが求められる。 そのために、事前準備や副案の工夫を充実させ、子ども一人ひとりの興味・関心や発達に合った活動を展開できるようにすることが重要である。 また、教職員同士が情報を共有し、連携を深めながら保育を進めることで、より丁寧で質の高い教育の実現を目指していく必要がある。
研修	教育内容が問われる時代、教職員の資質向上が常に求められるので、計画的かつ時代が求める教師となっていくための研修を的確に実施し、各教職員が個々のスキルを上げていく体制作りをする。また、研修内容を共有化していくためのシステム作りをしていく。	計画的な研修体制の確立、校外研修への参加、研修報告会の実施	得意な分野の更なる追求に力を入れて取り組んでいる。自身の強みを活かし、より高いレベルを目指すことが重要だと感じた。また、苦手な分野についても積極的に研鑽を積む姿勢を大切にしていく。これによって、総合的なスキルアップを図り、子ども達の成長を支える力を養っていく。	現場で研修した内容を取り入れる際には、臨機応変な対応が重要である。研修の機会が教諭にとってリフレッシュの一環となることを期待している。現在、研修は対面形式が多いが、オンライン（オンデマンド）研修も積極的に活用する必要がある。 将来的には、先生方のアウトプットの場として希望制で保護者への勉強会を開催するのも面白いと思う。特に発達に関する話は、保護者会の際に時間が足りず、興味のある保護者も多いのではないかと感じる。この点で「子育て支援」として卒園児へのフォローにもつながると考えている。 忙しい業務の合間に様々な研修に参加し、スキルアップを図っている。また、研修で得た情報を園内に持ち帰り、他の職員と共有することで、全体のレベルアップにもつなげていく。	4	今年度は、教職員一人ひとりの学ぶ意欲が高く、教育をより良くしていこうとする前向きな姿勢が園全体に根づいていたことが大きな成果である。 日々の実践を振り返りながら改善を重ね、教育の質向上を目指す意識が職員間で共有されており、園の教育力を支える大切な基盤となっている。 また、こうした姿勢は子どもたちにとって安定した教育環境をつくるうえでも重要な意味を持っている。 一方で、今後はスタッフ同士がより効果的に学び合い、必要な情報を円滑に共有できる仕組みを整えることが課題である。 あわせて、新人職員への育成体制をより明確にし、安心して成長できる支援のあり方を充実させていく必要がある。 これらを進めることで、園全体の専門性と組織力がさらに高まり、より安定した質の高い教育環境の実現につながると考えられる。	次年度は、教職員が外部研修への参加、他園見学、園内での保育見学など、多様な学びの機会を継続的に得られるよう、研修体制をさらに充実させていくことが重要である。 さまざまな学びを通して新たな視点や実践方法を取り入れ、日々の保育に生かしていくことで、教職員一人ひとりの専門性を高めていくことが期待される。 また、研修で得た内容を個人の学びにとどめず、園全体で共有し、実践につなげていくためには、共有方法や振り返りの仕組みを整えることが必要である。 こうした取り組みを積み重ねることで、教職員同士が学び合う風土が育ち、園全体の教育の質向上と安定した教育環境づくりにつながっていく。
保護者、地域住民との連携	保護者や地域諸団体や地域住民との交流・連携を図る。	保護者の会との情報交換、学校運営に対する外部団体の参画、外部要望の学校運営に対する反映、保護者に対する協力依頼	地域の方々との交流を深めるために、町内会などの結びつきを強く持つことに力を入れてきた。行事やイベントには子供達と一緒に参加することも検討し、地域の絆をさらに強める努力を続けていく。この取り組みにより、地域との関係性が一層豊かになり、互いに支え合える環境づくりに貢献できていると感じた。	園児の様子を保護者や地域の方々に伝える際は、友達語にならないように気をつけることが大切。アピタや老人会への訪問は、地域との交流を増やし、子供達にとって良い刺激となっていた。 天城連峰太鼓のクレームに関しては、今後は慎重に対応をお願いしたい。特に、クレームを最初に受けたのがPTAのお手伝いの保護者ということもあり、園門付近に先生も配置して対応する必要がある。中田本町老人会との交流は、普段お年寄りと接することの少ない園児たちにとって良い刺激や温かみを感じられる場になった。今後も地域との交流を続け、お互いに助け合える関係性を保てれば良いと思う。 アピタ静岡でのイベント出演は、いつもとは違う緊張感の中で子供達が堂々と踊りを披露し、自信につながった。今後も外部への出演機会があれば良い。 参観会では、先生の解説付きで活動の様子の映像を見ることができ、普段の様子を知る良い機会となった。	4	地域や園を支える多様な人々とのつながりを大切にしながら、園の取り組みや子どもたちの姿を積極的に発信してきたことにより、園の理念や教育活動が地域に広く共有され、理解の促進につながったことは大きな成果である。 発信を通して、園が大切にしている考え方や日々の実践が伝わり、地域との信頼関係を深める基盤づくりが進んだといえる。 一方で、今後は発信内容をさらに整理・体系化し、園の教育方針や子どもたちの学びの過程、成長の意味がより分かりやすく伝わるよう工夫することが求められる。 情報の見せ方や共有方法を改善し、受け手に伝わりやすい発信を進めることで、園への理解と共感をさらに広げていくことが期待される。	今後も、保護者参観や相談の機会を継続的に設けることで、園の教育活動に対する理解と協力をさらに深めていくことが重要である。 保護者が園での子どもの姿や教育方針を直接知り、気軽に相談できる環境を整えることは、家庭と園との信頼関係を強め、子どもの育ちをともに支える基盤となる。 また、地域住民、とくに高齢者を含む多様な世代が園に関わりやすい仕組みを整えることで、地域全体で子どもたちを見守り育てる意識を広げていくことも求められる。 こうした取り組みを通して、園への理解と協力の輪を地域に広げ、開かれた園づくりをさらに進めていくことが期待される。
情報提供	幼稚園に関する活動状況などに関する情報発信を積極的に行う。	ホームページ、フェイスブック、インスタグラム等による情報発信、パンフレットの毎年の更新、園メールやICTシステムの活用による保護者への情報提供と園との情報交換	現代の保護者向けに様々なアプリが開発されている一方で、ペーパーでのお便りも考慮するようにしている。デジタルとアナログの両方の良さを活かしながら、保護者にとって役立つ情報発信を心掛けてほしい。この取り組みにより、保護者とのコミュニケーションが一層円滑になり、双方にとって便利であり続けると感じている。	インスタグラムやホームページでの情報発信は、保護者が子ども達の日々の様子を見る良い機会となっており、子ども達も自分の写真が載ると喜んでいる。また、未就園児や県外からの転入を考えている方の参考にもなっている。 タブレットについては、アナログとデジタルの良さを活かしながら関わってもらいたい。保護者としては、タブレットで何をしているのか気になることもある。 来年度導入するおうちえんは、写真が鮮明に見られるため楽しみにしている。先生方が撮る写真はカメラマンとは異なる良さがあり、日常の一瞬を捉えている。	4	Instagramやホームページを活用したタイムリーな情報発信により、園での活動の様子が見えやすくなり、保護者が日々の子どもの姿を安心して確認できる環境が整った。 また、「おうちえん」を通じた丁寧な情報共有によって、保護者は子どもの育ちや園での生活を具体的に把握でき、園への理解と信頼がより深まった。 ICT活用の進展により、情報伝達の質と速度が向上している点も大きな成果である。 一方で、発信手段が増える中では、内容の整理や伝え方の一貫性を保つ工夫が必要であり、あわせて、より多くの保護者が無理なくICTを活用できるよう、周知やサポート体制を充実させていくことが今後の課題である。	今後は、SNSなど多様な情報発信手段を活用しながら、保護者とのトラブルを未然に防ぐための丁寧な対応を進めていくことが重要である。 そのためには、発信の目的や内容、取り扱いのルールについて事前に分かりやすく説明し、保護者の理解と協力を得ながら運用していく必要がある。 また、情報発信に対する園と保護者の共通理解を深めることで、安心してやり取りできる関係づくりを進めることが求められる。 今後は、単に情報を届けるだけでなく、信頼性や安全性にも十分配慮した発信体制を整え、園と家庭が円滑に連携できるコミュニケーション環境の充実を図っていくことが期待される。
				総合評価	4		